

金と銀の輝き—宗達とその時代—

実践女子大学文学部美学美術史学科教授

仲 町 啓 子

琳派とは

俵屋宗達、尾形光琳、酒井抱一らの画家を総称して今日琳派と呼んでいます。過去には尾形流をはじめ、光琳派や宗達派あるいは光悦派などと呼ばれたこともありました。ただし、琳派の作家たちにはあまり強固な流派的なまとまりはありません。江戸時代の他の流派とは異なり、彼らには直接的な師匠関係はほとんどの場合存在せず、いわば私淑というかたちで、各の画家がそれぞれ先人の造形を継承し、異なった場所と時代において独自に活動して行きました。

江戸時代の初めの京都で活躍した俵屋宗達によって創始された琳派は、江戸時代中期には尾形光琳によって継承されて行きます。京都で活躍した町家出身の二人の制作が、謂わば琳派の核です。その後、京都と江戸で幕末明治に至るまで多くの作家が琳派風の制作を試みます。「琳派」とは、それらすべての制作の総称なのです。

琳派の画家は、武家社会の公式の絵画となった狩野派や、庶民的な発想に根ざす浮世絵などとは異なり、市井にありながらも伝統的な貴族社会の絵画であった大和絵をめざし、日本の古典的な物語や季節の草花を主な画題として、優美かつ繊細な情趣を追求して行きました。

高価な岩絵の具をふんだんに使った絢爛とした画面は、装飾的あるいは意匠的であると同時に、豪華かつ贅沢でありました。屏風や掛幅にとどまらず、扇面や団扇、香包などの日用品、さらには蒔絵のデザインや陶器の絵付けなど、その活動が生活芸術全般に及んでいることも琳派の大きな特色です。

宗達とその時代

宗達の活躍した十七世紀前半は、徳川幕府の草創期にあたります。武家政治の中心が再び東国に移った後、近世京都の町を舞台に生み出されたのが、宗達の作品でした。それは大局的に見れば、政治的・経済的には圧倒的に優位にあった東の新興の武家政権に対して、古くからの都である京都の文化的な優位を示す、一連の動きのひとつであったとも言えましょう。

実際、時の後陽成天皇や後水尾天皇は、数々の拘束を課してくる徳川政権を快く思っていないことは事実であり、さらに言えば自分たちの文化的優位に対する確信があったことも確かです。そのような考えから、この時期さまざまな形で平安・鎌倉時代の貴族文化が見直され、復興されて行きました。平安時代はじめの「貞観の治」と言われた水尾天皇（清和天皇の別称）及びその子の陽成天皇に因んだ後水尾・後陽成の名前が示しているように、両帝は武家の登場以前の、天皇や公家が世の中の中心であった時代への憧憬を募らせていました。しかし、それは広い意味での宗達登場の時代背景ではありましたが、宗達はけっして公家や朝廷等の願望や価値観を造形化した絵師ではありません。

宗達を支持し、育んだのは、むしろ京都の上層の町人たちです。室町時代（十五世紀ごろより）の京都の自治や文化は、〈町衆〉と呼ばれる人々によって支えられていました。その町衆の中から室町時代末ごろから有力な家が生まれて来ます。彼らのなかのある者は権力者と結びつき、他の者は大きな商いに成功し、海外貿易に乗り出し、また大きな土木工事をを行う実力者も出て来ました。彼らの経済力こそ、宗達を生み出す豊かな土壌となったのです。

宗達の前半生にとって、特に本阿弥光悦と角倉素庵の存在は大きかったと思われます。宗達に十二世紀の料紙装飾などを参考にしながら、美しい料紙の制作を依頼したのは彼らでした。新しい書風を生み出しつつあった光悦は、料紙にも新趣向を期待しました。光悦の依頼は宗達の腕を磨き、宗達の成長は光悦の書風の展開を促したと言って

も過言ではないでしょう。

慶長年間（一五九六―一六一五）を中心として、ふたりは数々の傑作を「合作」しました。宗達の伝記については、彼の残した作品以外はほとんど不明です。おそらく町家の出身者で、絵を描くのが好きで市中に仕事場を持ち、料紙や扇絵の制作をしていたのではないかと推測されています。一六二〇年代の中頃には、朝廷から「法橋」の称号を賜ります。宗達の後半生となる寛永年間（一六二四―四四）には、屏風絵などの大作も多数手掛けるようになり、宮廷関係者にも広く名前が知られて来ます。退位後の後水尾院からも一六三〇年に屏風絵の注文を受けています。もちろんこの時期においても、「風神雷神図屏風」を注文した打陀氏や、「松島図屏風」の発注者である谷氏のような大町人も、宗達の有力なパトロンでした。

宗達の主な活動の場は、武家が権勢を誇示するような儀礼や格式を重んじるところではありません。そのような場では「唐（歴史的な中国）」の視覚的イメージ（図像）が尊重され、しかも決められた図柄をお手本通りに制作することが肝要と考えられていました。宗達がそのような形式や伝統の束縛から比較的自由に制作できたのは幸いでした。「唐」のイメージが重視される社会の中での高級な「和」風趣味こそ、宗達が生み出した雅なものであり、同時にそれは琳派が江戸時代を通じて担ってきた役割でもあったとも思われます。

1602 宗達「平家納経」（化城喻品・囑累品・願文）の修理

1608 嵯峨本伊勢物語

1614 ↑千少庵書状に「俵屋宗達」とあり

1621 ↓宗達筆養源院襖絵・杉戸絵

この頃「あふぎは都たわらやがひかるげんじのゆふがほの・・・」

1625 谷正安（号「海岸」）海会寺の跡地を購入し祥雲寺の建立に着手

↓宗達筆「松島図屏風」

1630 光広の斡旋で宗達は宮中の「西行物語絵巻」を写す

一条兼遐（後水尾院の弟）が後水尾院へ宛てたの手紙に宗達が後水尾院から

「楊梅図金屏風」を含む3双の屏風の注文を受けたという内容あり

1637 ↓打它公軌が妙光寺を再興。この頃「風神雷神図屏風」か

1642 この時宗雪はすでに法橋